

〈研究ノート〉

『大江天也伝記』作者 雑賀博愛とその文書について

Research Note: About Hiroyoshi Saiga,
the author of Tenya Oe's biography and his documents

大西 比呂志

Hiroshi ONISHI

はじめに

大江卓(1847~1921)は、高知県(土佐国幡多郡大月町柏島)出身で尊皇倒幕運動に関わり、明治維新後民部省、大蔵省に出仕し兵庫、神奈川の県官を務め、部落解放建議、芸娼妓解放令に関与し、特に日本初の国際裁判となったマリア・ルス号事件を指揮したことで知られる。フェリス女学院の創設者キダーの支援者でもある。その後西南戦争(1877年)の際に反政府挙兵計画に加わって下獄し、出獄後は大同団結運動に参加し衆議院議員にも当選したが、まもなく政界を引退して実業界に転身した。さらに日清戦争後、朝鮮での鉄道事業(京釜鉄道)を通じて半島経営に参画し、中国革命期には孫文、雲南の刀安仁などの支援を行った。大正期に入ると土佐同志会に拠って閥族打破運動を進めたが、突如仏門に入り「天也」と号し、帝国公道会を創立(1914年)して没するまで被差別部落の融和運動に尽力した。

大江卓の生涯は多面的であり、また様々な評価がなされてきた¹。筆者はこの毀誉褒貶ある生涯に興味を抱き、近年『大江卓の研究 在野・辺境・底辺を目指した生涯』(芙蓉書房出版、

2023年9月)を刊行した。その目的の一つは、それまでの大江研究の基礎となっていた伝記雑賀博愛『大江天也伝記』(1926年、大江太)を検証し、あらためて大江の生涯を全体として捉えることであった。『伝記』は主に晩年の大江の回想を軸に、著者の価値観の投影や根拠が曖昧な記述が多々みられ、その成立経緯と内容を点検することは大江研究の基礎と考えられたからである。

大江卓研究の調査のなかで雑賀博愛のご子孫と連絡が取れ、そのご厚意によって数次にわたって史料が提供された。「雑賀博愛関係文書」と呼べるものである。現在、整理中で全容はもとより個々の史料について内容が十分把握できているわけではなく、公開への手続きにも至っていないが、この資料群は大江や雑賀の研究だけでなく、日本近代史の様々な分野に有益な情報を含んでいる。近年「発見」されたこの史料の内容を、拙著に十分活かすことができなかつたことは残念であるが、本稿はその重要性に鑑みてこれまでに判明した概要を紹介するものである。以下の挿入写真は、すべて「雑賀博愛関係文書」に含まれるものである。

1 雑賀博愛関係文書

ジャーナリスト雑賀博愛

『大江天也伝記』の作者雑賀博愛^{さいがひろよし}は、1890年福岡県御原郡小郡村(現小郡市)で父義敬が勤める巡査駐在所で生まれた。退職した父が村長となった嘉穂郡宮野村ついで福岡市東職人町に移り住むが、貧困生活からの独立を目指して小学校を卒業後、すでに盛名あった同郷の福本日南(誠、1857-1921)を慕って九州日報社に入社する。日南は1889年陸羯南らと新聞『日本』を創刊し、アジア南洋群島への通商・移民を目指す東邦協会を設立し、招かれて九州日報の主筆兼社長に就任して健筆をふるった。雑賀がその門下となったのは日南が1908年第10回衆議院に憲政本党から福岡県郡部で当選し、赤穂義士の忠臣蔵を扱った『元禄快挙録』の連載

(1908年～1909年、295回)で人気を博していた頃である²。在野のジャーナリストだけでなく、政治家、文学者、歌人など多彩な側面を持つ「文豪・歌人・国士」日南は雑賀の生涯の師となった³。

1910年、雑賀は日南が経営方針の対立から九州日報を退社すると馬関毎日社に転じ、さらに後を追って6月上京した。師から鹿野の号を授かり、経済誌『金星』社員をへて三宅雪嶺の政教社に入り雑誌『日本及日本人』の編輯や執筆に加わった⁴。このころ南豊島郡下渋谷村に住んで結婚し、傾倒する西郷隆盛の伝記の執筆に着手し、1919年『西郷南洲翁 大人格の偉観』(止善堂書店)上巻を上梓する頃には伝記作者としても知られるようになった(図1 雑賀博愛)。

図1 雑賀博愛



1923年9月の関東大震災の混乱のなか政教社は分裂するが、雑賀は留まり主筆となって退社(1935年)するまで多くの論説を執筆した。昭和期に入ると安岡正篤が主宰する金鷄学院や国維会、日本農士学校で維新史を講じた。

この間次第に日本の伝統思想への回帰を強め、『名節論』惟神社、1936年)、惟神道かなながらのみちを唱道して日南と同様に多くの万葉調の和歌を詠んだ。戦争が本格化する頃には『大西郷全伝』(全5巻、1937年～39年)、佐久間象山、藤田東湖、吉田松陰、橋本左内などの『勤皇志士叢書』(1942年～44年)を著し、東亜新秩序を掲げる近衛内閣のもとに設置された南洋経済研究所の嘱託もつとめた。没したのは1946年7月、明治の国粹主義の変転を体現するような56歳の生涯であった⁵。

雑賀博愛関係文書

1919年6月27日、雑賀は初めて会った晩年の大江を次のように記している。

「曇 大木遠吉伯を訪ふ。伯の紹介を得て更に大江卓翁を訪ふ。此日初めて翁を見たり、老来益々元気にして記憶頗る明確、昔日を語るに月日を誤らず。南州談を聞く。午後出社」

「雑賀博愛日記」1919年6月27日

大木遠吉は大江が明治初年に賤称廃止を建言した時の民部大輔大木喬任の嫡男で、この頃大江が創設した帝国公道会副会長であった。数年前より取材を受けて雑賀を知っていた遠吉は、この頃自らの伝記を残そうとしていた大江を紹介したのである。

以後、雑賀は大江を頻繁に訪れ談話を収録するなど作業を進め、大江没後に出版したのが『大江天也伝記』(1926年)である。その経緯は拙著に記してあるが、重要なのは雑賀がこの間に伝記執筆のために数々の文書を借り出していたことである。1921年3月30日、大江に呼び出されて正式に伝記執筆を依頼された雑賀は、翌日「自記の年譜を借り一読の上更に筆記」にかかり、5月17日には「此日終日籠居、大江文書を渉猟す」、27日「籠居史書を猟る、大江文書を浄書」と記している。さらに6月11日には「此夜大江家より使者来り、一、大江卓叙歴三巻 一、後藤伯手簡二巻 一、

陸奥伯手簡二巻を托し来る」とある。翌日からこれらの筆写にかり、15日からは「大江等は未決囚として取調を受けつゝある時、同志間に往復したる密書を写す」ことになった。大江家から多数の文書が提供されたことがわかる。

上の記述に相当するのは、現在国会図書館憲政資料室に所蔵される「大江卓関係文書」（1982年大江穂子氏より寄贈）のなかの「大江卓辞令」三巻（請求番号255）、後藤象二郎書簡2通（同7-1、2）、陸奥宗光書簡2通（同69-1、2）や「獄中未簡」（161-1、2）と思われる。つまりその後大江家に返却されて、戦後になって遺族から国会図書館へ寄贈されたのだろう。しかしそれはすべてではなかったようだ。2022年、雑賀博愛の旧宅から雑賀自身の文書とともに、大江の旧蔵文書と思われる史料が多数発見されたからである。それらがなぜ雑賀のもとに止まったかは不明であるが、大江の伝記編纂が一時挫折し没後に再開されたことにも関係があるかもしれない。

この「雑賀博愛関係文書」発見の糸口になったのは、福岡県在住の地域史研究者石瀧豊美氏の筆者へのご教示である。石瀧氏は20年以上前に福本日南研究の一環から雑賀博愛の長男千尋氏から若干の資料提供を受け、博愛について唯一といえる論考を書いておられた⁶。2021年2月、筆者からの問い合わせに石瀧氏は、東京都東久留米市の雑賀家の連絡先をご教示いただいた。さっそく雑賀家に照会の手紙を出したが、すでに千尋氏は物故されており、またちょうど夫人の逝去と重なって取り紛れ、旧家の整理に訪れた孫にあたる雑賀明良夫氏（埼玉県戸田市在住）が筆者の手紙を発見し、返信をいただいたのは翌年の正月明けであった。明良夫氏はさっそくご尊父千尋氏がまとめた博愛の小伝『鹿野翁をしのぶ』（私家版）を送付してくださり、同書に添付された博愛所蔵の文書類の写真から、旧宅に多数の資料が存在することがうかがわれた。

以後、雑賀明良夫氏の全面的なご協力を得て、同年6月3日に筆者の大学研究室に最初の文書が搬入され、同月25日、翌2023年2月8日博愛旧宅での調査をへて、数日後にはさらに文書を搬送していただいた。

これら文書資料は友人研究者の協力を得て、仕分けと袋詰め、カード採録、目録作成、主要史料のデジタル撮影などが行われた。作業に参加していただいたのは、櫻井良樹（麗澤大学）、季武嘉也（創価大学）、松本洋幸（大正大学）、鈴木百合子（横浜市史資料室）、松谷昇藏（日本学術振興会特別研究員）、片岡那緒（本学大学院生）の各氏である。

三つの文書群

「雑賀博愛関係文書」は、(1)雑賀博愛文書、(2)大江卓旧蔵文書、(3)後藤象二郎旧蔵文書と大別できる。現段階で整理は完了していないが、仮の目録への採録総数は274件、うち(1)は181件であるが、(2)(3)は区分しがたいところがある。

(1)雑賀博愛文書

雑賀自身の資料群で以下のような6つからなる。ここでは主なタイトルを挙げる。

①著作

日本及日本人春季拡大号、第735号～738号、第769号、鹿野山人文集日本及日本人大正12年～昭和4年度、昭和6年度～昭和10年、鹿野文稿昭和13年、鹿野歌稿明治43年以降首巻、鹿野山人詠草、大正十二年大震以後鹿野歌稿、鹿野歌稿第一巻、第二巻

②史料集など

西郷隆盛文書各隊名簿、意見書草案、書付叙任辞令其他、萬留下巻元治元年子三、詩稿式冊之内詩巻、詩文稿月照遺言、日本道学淵源録一、二、日本道学淵源続録一～四、日本道学淵源続録増補一、二、順列十二篇、南涯詩文集巻一～三、維新史料聚芳、笹

村草家人文集上、下、子規先生の晩年 赤木格堂先生自筆原稿、
利鎌舎先生歌集、答問抄

③日記・日誌（〔 〕は整理上の補記）

重要日記明治43年～45年、当用日記大正3年～14年、当用日記
昭和元年～6年、〔日誌〕昭和9年、〔Sketch Book〕昭和10年、
日誌第2巻、〔日誌〕昭和12年、鹿野日誌昭和14年～昭和15年、
大患記昭和16年、鹿野日誌昭和17年

④雑賀あて書簡（主な差出人、→は雑賀以外の受取人）

赤木亀一／五百木良三〔草稿〕／伊藤高順／伊藤彦左衛門／伊
藤彦太郎／内堀忠利／大谷七郎／岡谷正也／奥田庄一郎／小口竹
重／海洋政策研究所／鹿児島県奉祝会／狩野亀志／川嶋浪速／木
島完之／工藤作左衛門／桑原稔三／小泉義勝／越川三郎／小西千
比古／五味清人／雑賀浅茅／雑賀清香／雑賀千草／佐々木てる／
下村為山→政教社／世界修理固成会事務局／田崎仁義／篤農協会
柏原真治／内藤敬三／農士学校／荷田正次郎／福田次郎／藤直治
郎／宮沢透／向後正美／室浩之／森清人／安江介三郎／安岡盛
治・正篤／安田源四郎／矢幡健五／山浦甫／山田守／吉松重松／
陸実〔陸翁与安岡雄吉書簡写〕→安岡雄吉〔正篤祖父〕明治33年
9月21日付／若梅善治／渡辺敏

⑤講演記録・メモなど

昭和十一年七月十四日京橋署主催警察講演会雑賀博愛先生述
君臣の大義、關雲録、〔手帳住所録〕、川島浪速翁対支策問答録
翁ノ自記セルモノ、子規先生の晩年 赤木格堂先生自筆原稿、大
江卓略譜、雲南紀行原稿カ、県史神代編 鹿児島県奉祝会

⑥福本日南関係

日南先生遺蒐、日南歌稿卷一、二、日南翁遺翰、日南先生遺稿
芳子終焉の記

①は長年にわたり「日本及日本人」に発表した論文、記事をま

とめた「鹿野山人文集」や「鹿野歌稿」と題された自作の和歌集、②は執筆のために蒐集した「西郷隆盛文書」の筆写資料などで、几帳面な性格を示すようにいずれも年ごとに4つ目袋綴じの和装本で残されている。③は博文館当用日記を使用し、いくつか欠年があるが、1910年～1931年、1934年～37年まで比較的詳細な記述があり、巻末には関係者の住所録があつて著名人士の住所が判明して有益である。④は雑賀への来簡で、関係した政教社の五百木良三、安田源四郎、南画家俳人の下村為山、金鷄学院の安岡正篤〔養父安岡盛治と連名〕、大陸浪人の川島浪速、ジャーナリスト・代議士の赤木亀一〔格堂〕、血盟団の木島完之、経済学者田崎仁義などのほか、日本農士学校、海洋政策研究所〔小西千比古〕、鹿児島県奉祝会、世界修理固成会といった団体からのものがある。⑤は雑賀の講演記録や取材筆記など、⑥は福本日南の遺墨や和歌など、特に「日南翁遺翰 鹿野歳」と題された1巻は、1912年9月日南から号「鹿野」を下された書簡を軸装したもので、雑賀がこれを生涯大事に保持していたことがうかがえる。

(2)大江卓旧蔵文書

大江が旧蔵し雑賀に提供されたとと思われる資料群である。大きく分けて大江あて書簡群とマリア・ルス号事件関係の文書がある。

・大江卓あて書簡（主な差出人）

井上角五郎／岩田周作／岩田武／岩村通俊／大井憲太郎／小野梓／加藤高明／木戸孝允／後藤象二郎〔迂象〕／五代友厚〔木戸公追啓右為一卷〕／山東直砥／末松謙澄／杉山茂丸／関義臣／高嶋軻之助／伊達宗城／谷干城〔カ〕／刀安仁／中江篤介〔兆民〕／中村景一／林有造／林董／平岡浩太郎／福井治／福地源一郎／古沢滋／益田英作／柳原前光〔外務大丞〕／醇親王／李根沢〔論政改革興亡問題〕／趙秉式〔日韓協約後問答〕

・マリア・ルス号事件関係〔外務省用箋使用〕

「別紙第四号」英国公使より呈出候規則書私解、小笠原壱岐守
手記

「別紙第七号」神奈川県令陸奥宗光→帝国領事 1872年

「別紙第九号」シ、テ、バウイール→神奈川県令大江卓 1872年

「別紙第十号」神奈川県令大江卓→イーティータツプ

明治5年

「約定」上野景範→オウレリヨ・ガルシャ・ワイガルシア

明治6年

(3)後藤象二郎旧蔵文書

幕末維新期の書簡や政局に関わる史料で、時代的に雑賀や大江のものではなく、差出人や内容からして大江の岳父後藤象二郎が旧蔵していたものと思われる。後藤に関してまとまった史料は、静嘉堂文庫（世田谷区）の蔵書類や伝記稿本など以外は所在不明とされており⁷、ここに含まれる後藤象二郎関係史料は新出である。

なかの書簡の差出人→受取人で判読できるものを示すと以下のようである。

〔辻将曹〕→〔後藤〕象二郎／小笠原壱岐守手記→米国ミニストル・レンデントアルビツァンホルケンボルグ／小松〔帯刀〕→後藤〔象二郎〕／松陰→大東先生／武陵罪人〔山内容堂〕→子悦先生〔吉田東洋〕／辻将曹→〔後藤象二郎〕／奈良原幸五郎〔繁〕→後藤象二郎／福岡孝次〔孝弟〕→後藤象二郎／元吉〔吉田東洋〕→良輔〔後藤象二郎〕／介堂〔永井尚志〕→後藤象二郎

「武陵罪人」「松平容堂」は第15代高知藩主山内豊信のことで、参政吉田東洋、後藤象二郎、福岡孝弟らを登用し、後藤の献策を受けて大政奉還の建白をしたことで知られる。本文書には慶応3（1867）年9月の「松平容堂建白書」（手写2枚と4枚の2種）や「朝廷ヨリ御垂問御書付」と頭書された草稿もある（仮目録Ⅱ

- 2 -12)。

大江卓は1875年後藤の次女小苗と結婚したが、立志社事件で下獄した間の1883年、後藤は陸奥宗光と協議して娘との婚姻を解消させた⁸。しかし大江は出獄後、小苗が戻った高輪の実家後藤邸にともに住み、後藤の政治や実業方面での片腕として1897年の後藤の死去まで尽くした（翌年小苗も死去）。大江は明治天皇の後藤邸行幸（1892年7月）に際し接遇員をつとめ、後藤の盛大な葬儀を取り仕切り、銅像建設の発起人にも名を連ねている⁹。大江はその後長男太の麻布の邸や鎌倉の極楽寺にも住んだが、後藤の晩年に女婿、側近として仕えた大江が、後藤が所持していた史料に接して保管したとしても不思議ではない。

さらに、大江は幕末維新期の歴史継承にとりわけ熱心であった。明治末年に黒竜会（内田良平）から全6巻の大冊で刊行された『西南記伝』の序文には、「大江卓氏は特に本会の為に重要な幾多の文書を提供せられ」と記されている¹⁰。また大正末年に出された『坂本龍馬関係文書』（日本史籍協会叢書）の「坂本龍馬伝」でも「刺客の一人なる、当時の斎原治一郎今の大江卓の追懐談」に拠って天満屋事件の図面とともに争闘の様子が生々しく叙述されている¹¹。大江は自らの文書を子孫に継承させ、現在国会図書館に「大江卓関係文書」として残されているように、後藤の史料の重要性を認識して自らのもとに置き、後述するように公の維新史編纂事業に提供し、その前後に雑賀にも貸し出したのではないか。

2 史料紹介

以上のような「雑賀博愛関係文書」のなかから、いくつか内容を紹介しよう。

雑賀博愛日記から

まず本稿がすでに引用してきた日記である（仮目録 I-1 ～

24、29～32)。雑賀は1910年福岡から上京し日南の書生となるが、その頃の日記には、早稲田の聴講生入学への問い合わせに行った「帰りに先生の用にて犬養氏宅に立寄り」、帰宅後は「先生の手稿を写す」「先生の文集整理」と出てくる(1911年8月6日、9日)。日南の助手として上野図書館などへ図書の借り出し、板垣退助や犬養毅など政治家への取材、原稿の校正など、雑誌記者修行時代の記録である。また鏑木清方、半田鶴城、今村外園ら明治から大正期の東京に集う新進の画家との交流も記述している。

師と仰ぐ日南の動静は詳しく、衆議院議員になっていた日南が、再選を目指して第11回総選挙(1912年5月15日執行)で長崎県対馬に選挙区を変え国民党から立候補した際の記述がある。4月23日、日南と新橋を発車、博多から27日対馬厳原に渡り各所で演説会など開催する。その様子は「晴風 午前十時小舟に乗じて豆酩村遊説に向ふ。一行福本、浦瀬、平田、高、横関君、予。海波高く風強くして豆酩岬を回らずと云ふ。以て内院に上がり陸行して豆酩に至る。〔中略〕十時より同村太田某宅にて演説を開く。夜一時終る。会衆三十内外」(5月12日)といった具合である。

結局官憲と対立陣営の激しい妨害にあい日南は落選し、雑賀も選挙違反に問われる。雑賀は「在対馬 裁判所へ出頭、明日出航を申出づ。開票早川二百九十六、福本百七十六 内田十七 実に百二十を以て落選す。余りの意外に言ふ可き言語を知らず。憎む可きものは金権也。金権をして勝利せしめたる政府也」と激しい政府批判を記している(5月17日)。このほか九州日報以来のジャーナリスト赤木亀一(格堂、第12回及び第13回総選挙で次点、補欠選挙で当選)の岡山県での選挙についても記述があり、近年注目される「メディア議員」の選挙の実態を知ることもできる¹²⁾。

雑賀日記に頻出する親しい友人は、同じく日南門下で上京した彼を駅で待ち受けていた同郷の重徳来助(泗水、1892-1946)で

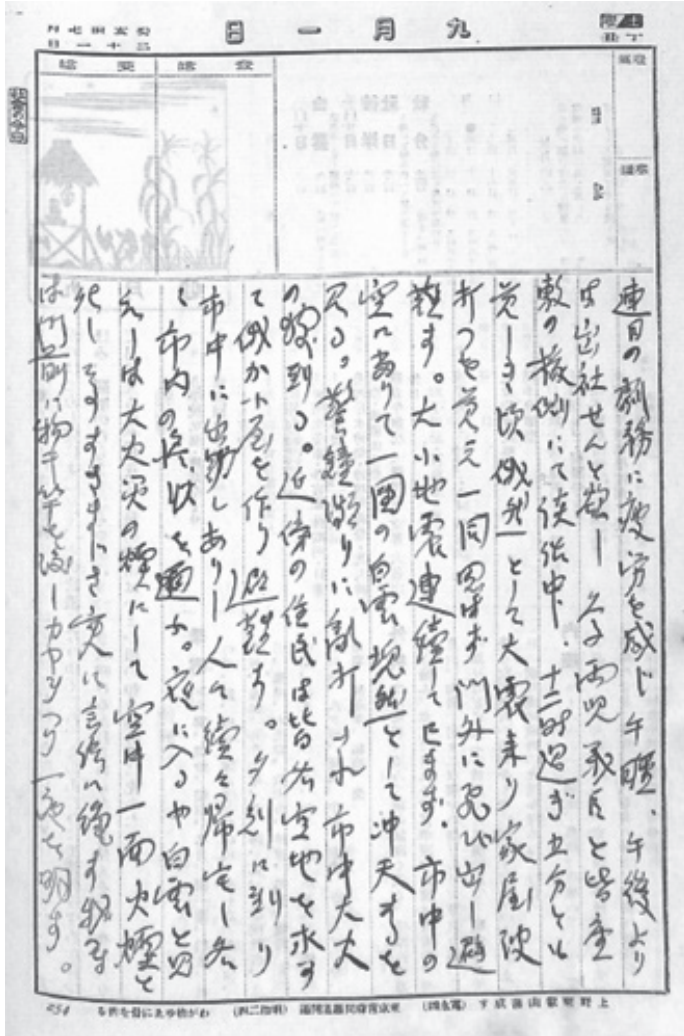
ある。早稲田の通信部を卒業後、ソルボンヌ大学を経て朝日新聞パリ特派員となった重徳は、日本にマルセル・ブルストやポール・ヴァレリーなど『佛蘭西文化の最新知識』（アルス、1922年）を紹介したことで知られる。その功績は生存中の1933年、フランス政府よりレジョン・ド・ノール勲章を授与されたほどである¹³。雑賀は1914年第一次大戦の欧州に出張中の重徳に送金をしていたようで、日記には「正金支店に就きて送金に就き聞合」「午前十時正金支店に於て重徳君への送金、百円を組む。二百五十二フラン」とある（1915年2月12日、13日）。

雑賀は1916年政教社記者となり『日本及日本人』誌上に論説や人物論などを執筆するようになる。1919年の日記には仕事仲間矢田挿雲（義勝）、河東碧梧桐（乗五郎）、寒川鼠骨（陽光）、杉浦重剛、志賀重昂、国分青崖、古島一雄などの政教社の同人、頭山満、宮川一貫、中野正剛といった福岡県の在京有力者、取材相手として植原悦二郎（政治学者、代議士）、今井嘉幸（弁護士、代議士）、寺尾亨（帝大教授、法学者）、江木衷（法学者、弁護士）、江木千之（内務官僚、貴族院議員）、神田正雄（朝日新聞記者、代議士）、三田村鳶魚（江戸学）といった著名人士、出張校正先の我等社では長谷川如是閑（山本萬次郎）以下、大山郁夫、丸山侃堂（幹治）、大庭柯公（影秋）ら一流の学者、ジャーナリストに会ったことを記している（6月20日）。

日記には仕事や遊びで行き来した上野や浅草など東京下町の社会風俗の描写に富んでいるが、大正12年9月1日の関東大震災時の記述は詳細である。この頃移り住んだ雑司ヶ谷の自宅でいたところ、「連日の激務に疲労を感じ午睡、午後よりは出社せんと欲し、久子〔妻〕、両兄、義臣〔弟〕と皆座敷の縁側にて談話中、十二時過ぎ五分とも覚しき頃俄然として大震来たり。家屋波打つを覚え一同思はず門外に飛び出し避難す。大小地震連続して已まず。市中の空に当りて一団の白雲塊然として冲天するを見る。警鐘頻

りに乱打され市中大火の波至る」と発生時の様子を記している(図2「雑賀博愛日記」1923年9月1日)。

図2 賀博愛日記 1923年9月1日



翌日知人を見舞いに出たところ、自警団に朝鮮人と誤認されて板橋署に拘引された。しばらくして解放されたが、数日後の夕方、在郷軍人が来訪して「予を以て鮮人と誤れる者あり警戒を要す」と忠告され、門前に「日本及日本人記者雜賀博愛」と白紙に大書して張り出した（6日）。震災時に朝鮮人への偏見や迫害があったことの一例である。

地震で神田区鎌倉町の政教社の社屋は焼失した。社主三宅雪嶺は経営難に陥っていた社の立て直しのため女婿中野正剛の東方時論社との合同計画を進めていたが、再建困難とみて13日に解散を発表した。しかし雜賀ら社員に受け入れられず三宅は退社し、雜賀は五百木良三の経営に移った同社に井上亀六、寒川鼠骨らと残り、翌年雑誌を復刊した¹⁴。この騒動の間、9月10日雪嶺邸で夫人三宅花圃から計画への協力を求められ、連日のように談合がなされたことが記されている。明治大正期を代表する政論誌政教社の解散にいたる経緯を知る貴重な記録といえよう。

陽明学者安岡正篤は、大学（帝大法科）での東洋文化研究に飽き足らず、発表の場を求めて『日本及日本人』に1920年から精力的に論文を寄稿している。そのきっかけとなったのは河東碧梧桐と同じく正岡子規門下の寒川鼠骨であったという¹⁵。

そこで知り合った雜賀は安岡が「国家の風教に尽くす」ことを目指して金鷄学院（院長酒井忠正、1927年）を創立すると、その講師となることを求められる。1928年4月26日の日記には「本朝金鷄学院に安岡君を訪ふ、学院の事業に來援を求めらる」とある。こうして翌月から毎火曜日に学院で維新史を講じることになった。翌29年には得意の南洲について講じ、3月24日の第2回生の卒業式では「安岡君挨拶、次で予教授代表にて一席挨拶、大休老師〔峰尾大休、埼玉県新座市平林寺住職、妙心寺派管長〕、原鉄五郎氏〔埼玉県人会委員、農政家〕の訓示あり。後院生代表として亀井一雄君答辞」と記している（3月24日）。答辞に立った亀

井一雄は戦後「安岡正篤師の高弟」と呼ばれた人物で、その日記には「雑賀先生」の姿がしばしば出てくる¹⁶。雑賀の昭和期の日記は安岡が率いる金鶏学院、国維会、日本農士学校などの右派思想団体の動向をうかがううえで重要な記録になるだろう¹⁷。

大江卓旧蔵文書から

まず注目されるのは、神奈川県権令時代のマリア・ルス号事件（1872年）に関連するものである。外務省から横浜に出向き、解放された清国人帰還のため来航した清国使節の応接にあたった外務大丞柳原前光が権令大江（と参事林道三郎）にあてた8月28日書簡では、使節一行を翌朝汽車で東京の延遼館に案内し外務省で談論するので、「秘魯国船に拐略せられし清民送回之事件」について、大江も「三十日朝十字迄に外務省に御出掛被成度、外務卿之命に御座候」と出張が命じられたことを伝え、その際「拐略せられし清民人名録出来候得ば、明後日談議之用に御揃へ有之度」と、名簿があれば持参するよう依頼している¹⁸。現場で裁判を指揮した大江が、外務省の清国との折衝でも重要な存在であったことが知られる。

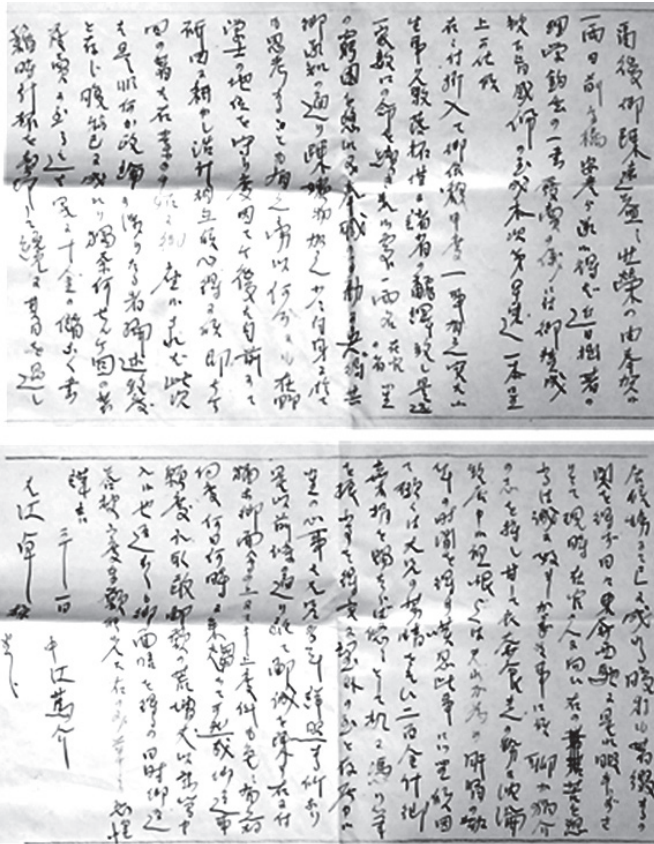
ほかにこの事件については伊達宗城外務卿から横浜各国公使談判の書簡（年月日不明）や、外務卿代理の上野景範が事件を不服として翌年来日した清国駐劄のペルー国公使ガルシアとの「約定」（1873年6月25日）など、外務省用箋に記述された書類がいくつかある。

次に大江あて書簡では、中核の高知人脈関係として岩村通俊（3通）、古沢滋（2通）、林有造らがあるが、「東洋のルソー」中江兆民（1847-1901）からの書簡（年月不詳31日）には次のようにある（図3、仮目録Ⅱ-2-5）。

「近日拙著の理学鉤玄の一書発売の儀に付御賛成被下旨感佩の至、成本次第早速一本呈上可仕候。右に付、折入て御依頼申度一

事有之、実は小生事久敷落拓僅に諸省の翻訳を致し是迄一家数口の命を續き来候〔中略〕因て願くは大兄の芳情を乞ひ二百金計御棄捐を賜はらば悠々として机に憑り筆を振ふ事を得、実に望外の至と存居申候」とあり、末尾欄外に「大江天也師蔵」と雑賀と思われる書き込みがある（図3末尾）。

図3 中江兆民書簡〔1886年〕月不詳31日

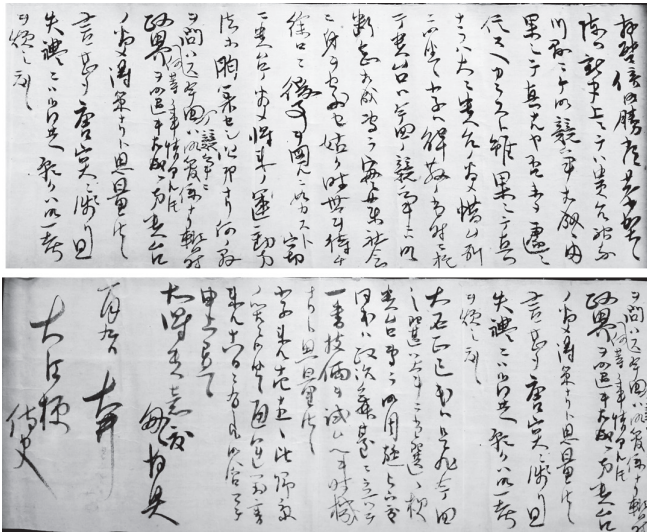


中江兆民『理学鉤玄』^{こうげん}の刊行は、1886（明治19）年である。当時、兆民はフランス学の泰斗として東京外国語学校、文部省、元老院など政府で就いていた要職をなげうって野に下り、ルソーの翻訳など自由民権運動の理論家へと転身しつつあった。兆民最初の著となった同書は、哲学の根本意義に始まってプラトン、カント、スピノザも論じた「日本で一番早い哲学概論」、「兆民自身の哲学思想を知るうえにも貴重な文献」と呼ばれるものである¹⁹。そのような意義のある同書であるが、刊行に際して大江に多大な借金を申し込むこの書簡から、当時の兆民の窮状と両者の関係を知ることができるだろう。

次に政界関係として、大同団結運動から初期議会期と思われるものがある。1890年1月と思われる大井憲太郎（1843-1922）からの書簡がある（仮目録Ⅱ-23）。大井は自由党激化事件（大阪事件）に連座し、前年の憲法発布の大赦で出獄したばかりであった。これによると「新聞紙上ニテハ貴台神奈川県ニテ御競争相成候由、果タシテ真ナルヤ」とし、「貴台ハ今回ノ競争ニハ御断念相成、専ラ實際社会ニ身ヲ委セ、姑ク時世ヲ待チ徐ロニ後事ヲ図ルニ如カズ」と出馬辞退を勧めている（図4）。この頃自由党内では来る第1回衆議院議員総選挙（1890年7月1日執行）に向け候補者の調整が進み、大江、井上角五郎ら政社派と、大井を筆頭とする非政社派の対立が深刻化していた。結局大江が神奈川県ではなく岩手県から出馬するのは、こうした大井派の動きが作用したのかもしれない。

大江は衆議院議員1期で政界を引退したあと実業界に入り、日清日露戦争期に朝鮮や中国にも進出するが、朝鮮関係に亡命政客^{キム・オクキョン}金玉均に関わる書簡、政治家李根沢^{イ・グンテク}（侍従武官長・軍部大臣など歴任）の「論政改革興亡問題」、趙秉式^{チョ・ビョンセ}（外部大臣など歴任）の「日韓協約後問答」といった意見書がある。さらに1908年大江が訪れる中国雲南省干崖の第24代宣撫使刀安仁からの2通の書簡は、刀

図4 大井憲太郎書簡〔1890年〕1月9日



の来日と帰国（1906年、1907年）に前後して、同地を訪問した岩本千綱、奥宮健之、小室友次郎などの動向についてふれており（仮目録Ⅱ-28-2、3）、これまで十分明らかでなかった雲南辺境革命派への日本人グループの支援を知る手がかりになるかもしれない。

大政奉還関係

後藤象二郎旧蔵と思われる文書で注目されるのは、後藤の生涯のハイライト大政奉還に関するものである。幕末慶応3年（1867年）政局の最大の焦点は、10月3日山内容堂が大政奉還の建白書を徳川慶喜に提出し、13日慶喜が諸藩重臣に大政奉還を諮問したのと同時に薩長に倒幕の密勅が下り、15日大政奉還が勅許されるといったように、武力によらない政権委譲（後藤や山内容堂）と武力倒幕（西郷隆盛）をめぐる政治闘争であったことはよく知られている。

この緊迫した政局について、東京大学史料編纂所『大日本維新

史料稿本』『維新史料編纂綱要』などによって史実は、「慶応三年九月三日高知藩老臣後藤象二郎「元燁」・寺村左膳「道成」藩命を以て、上京の途次、是日、大坂に於て鹿児島藩士西郷吉之助「隆永」を訪ひ、藩議、大政返上を建白するに決せるを告げ、また広島藩士辻将曹「維嶽」に之を談ず。将曹、直に賛意を表し、吉之助は京都に於て再議すべきを約す」、「慶応三年十月十四日幕府、鹿児島藩士小松帯刀・広島藩士辻将曹・高知藩士後藤象二郎・同福岡藤次等に旨を授け、摂政二条齐敬に謁し、大政奉還の奏請を速に勅許あらんことを請はしむ」などと紹介されている²⁰。

この大政奉還への動きは、高村直助氏の一連の精緻な研究によって「威力」奉還派（薩摩藩家老小松帯刀）と「平和的」奉還派（安芸藩家老辻将曹）がからみあって推移し、幕府側では永井尚志（玄蕃頭、介堂）が後藤や小松と頻々と往来して大政奉還へ尽力したことが明らかにされている²¹。本文書でも前半が欠け日付もないため文意は必ずしも明瞭でないが、永井が後藤にあて「真誠痛心罷在候間、毎々乍御足労、明朝又々御出願度、衆議ハ是非明日ニ致度、頻ニセリ立候得共、何分行届兼、明後日と相成〔中略〕草々不尽 後藤賢契 介堂」と面会を希望する書簡がある（仮目録Ⅱ-6）。

ここで特に指摘したいのは、氏が「維新史料編纂会引継本」（東京大学史料編纂所所蔵「文部省維新史料編纂事務局旧蔵史料」）所収の辻の11月29日付後藤あて書簡（図5、仮目録Ⅱ-26-2）や奈良原繁の10月5日付後藤あて書簡（図6、仮目録Ⅱ-26-1）など、辻の西郷の動静をさぐる動きや小松の尽力について参照されている史料の原本と思われるものが、本文書中に存在することである²²。

これらをまとめた包紙には「一、奈良原、二、辻将曹、三、右全 以上一卷」と、筆跡から大江と思われる書き込みの布切が付けられている（図6上部）。これら書簡の記述が「維新史料編纂

図5 辻将曹書簡〔慶応3年〕霜月〔11月〕29日

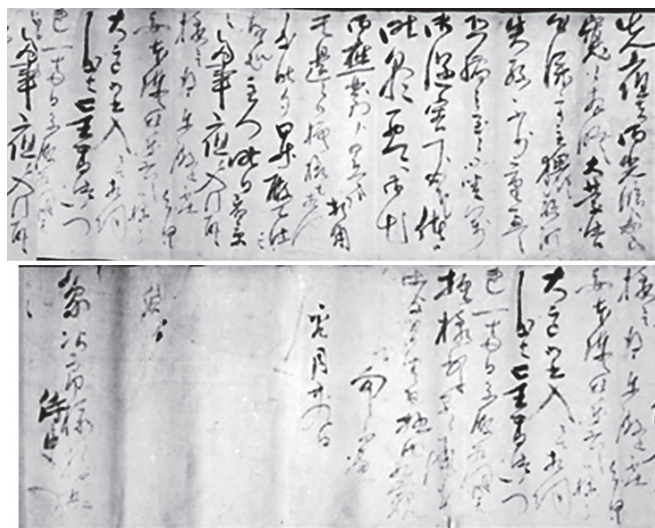
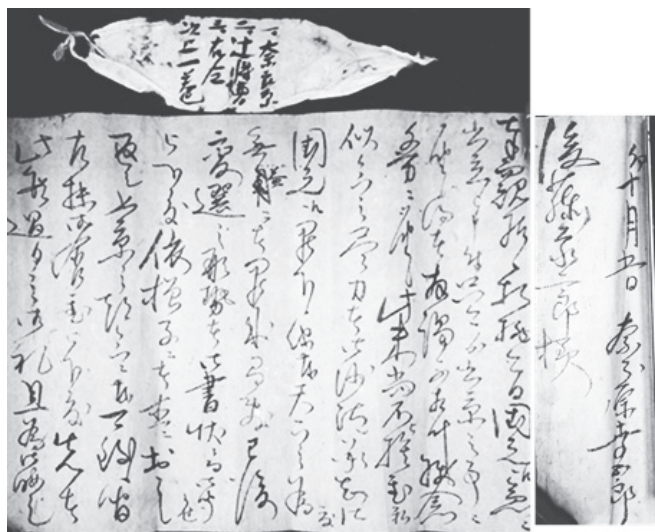


図6 奈良原幸五郎〔繁〕書簡 卯〔慶応3年〕10月5日



会引継本」に収録されているとすれば、保管整理した大江が明治から大正初年の時期に、文部省維新史料編纂会（1911年設置、戦後に東京大学史料編纂所）に提供したからではないだろうか。そして大江家に返却された後、大正期後半に伝記執筆で往来した雑賀のもとに渡ったのである。これらはあくまで筆者の推測であるが、いずれにせよ「雑賀博愛関係文書」に含まれている後藤象二郎に関する文書は150年以上の歳月、この間に起こった震災や戦災を免れ、東京の個人宅で残った幕末維新史の希有な資料であることは間違いない。今後、幕末維新史の専門家にさらなる分析をお願いしたい事柄である。

おわりに

以上のような三つの文書群からなる「雑賀博愛関係文書」は経年劣化が進んでおり、早急に整理保存の処理と内容の分析を行い、研究者、国民一般に共有される必要がある。幸いなことに本資料群は雑賀家と国会図書館憲政資料室の理解を得られ、近日中に同室に移管される運びとなっている。一般公開までにまだ時日を要するだろうが、本稿で指摘したように、本資料群は近代歴史研究に様々な知見を加えるものと思われる。

そうした重要な歴史資料の活用と公開への端緒を提供して下さった雑賀明良夫氏、石瀧豊美氏、整理作業に参加して下さった櫻井良樹氏ほか前記の研究者各位、貴重なご教示をいただいた高村直助氏（東京大学名誉教授・本学名誉教授）、筒井秀一氏（高知市立自由民権記念館館長）、高木翔太氏（高知県立高知城博物館学芸員）にお礼申し上げます。

【注】

- 1 拙稿「大江卓の研究(1)(2) その実像と虚像」本誌24号、25号、2022年、23年を参照のこと。
- 2 松本三之介「福本日南」同編『政教社文学集 明治文学全集』37、筑摩書房、1980年、438～441頁。石瀧豊美「明治日本の羅針盤 福本日南」『For You』82、2000年1月、同「校訂・福本日南年譜」『福岡県地域史研究』第23号、2006年3月。
- 3 雑賀鹿野「文豪としての福本日南翁」『伝記』3(7)、伝記学会、1936年、20頁。
- 4 「金星」4(1) 1916年1月に「民族的帝国主義」を寄稿。博愛の生涯については、さしあたり雑賀千尋『鹿野翁をしのぶ』（私家版）が最も詳しい。
- 5 「略年譜」『雑賀鹿野歌集』1977年、624頁。
- 6 石瀧豊美「『大西郷全傳』の著者雑賀博愛について」『県史だより』113、西日本文化協会（福岡県地域史研究所）2001年1月。
- 7 松尾章一「静嘉堂文庫と後藤象二郎伝」『日本近代史研究』5号、1960年、西川誠「後藤象二郎」伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』吉川弘文館、2004年、169、170頁。
- 8 拙著『大江卓の研究』芙蓉書房出版、2023年、110～113頁。
- 9 大町桂月『伯爵後藤象二郎』富山房、1914年、700頁、「東京朝日新聞」1897年8月6日。
- 10 『西南記伝』下一『明治百年史叢書』第85巻、原書房、1969年、11頁。
- 11 岩崎英重（鏡川）編『坂本龍馬関係文書 第二』大日本史籍協会叢書116、1926年、434頁。
- 12 佐藤卓己編『近代日本メディア議員列伝』全15巻、創元社、2023年がある。
- 13 重徳来助の生涯については、伊藤和也「最初の翻訳者重徳泗水の事ども マルセル・ブルースト受容の濫觴」『昭和文学研究』5巻、1982年が詳しい。
- 14 有山輝雄「雑誌「日本人」「日本及日本人」の変遷 その言論と同人」『日本近代史料叢書C-三 雑誌「日本人」「日本及日本人」目次総覧Ⅰ』日本近代史料研究会、1978年、46頁。
- 15 安岡正篤先生年譜編纂委員会編『安岡正篤先生年譜』郷学研修所・安岡正篤記念館、1997年、21頁。
- 16 亀井俊郎『金雞学院の風景』邑心文庫、2003年参照。
- 17 安岡については「国維会論」（河島真『日本史研究』360号、1992年8月）

など主に「新官僚」との関わりが論じられ、最近の研究でも、ロジャー H. ブラウン「安岡正篤の「東洋的な牧民思想」と内務官僚」『埼玉大学紀要（教養学部）』55（1）、2019年10月があるが、雑賀についてふれたものはない。

- 18 この書簡（仮目録Ⅱ-16-1）は、前掲拙著口絵に写真版で掲載してある。
- 19 松本三之介「解題」『中江兆民全集 7 理学鉤玄』、岩波書店、1984年、284～286頁。
- 20 東京大学史料編纂所「維新史料綱要データベース」（慶応三年正月～慶応三年十二月）7巻233頁、282頁。
- 21 高村直助『永井尚志 皇国のため徳川家のため』ミネルヴァ書房、2015年、211～218頁に大政奉還建白を後藤に促す永井の動きが詳述されている。
- 22 高村直助「安芸藩と幕末政局」36頁及び注65「辻維岳書簡」『日本歴史』851、2019年4月、同『小松帯刀』吉川弘文館、2012年、192頁「必死の尽力」。